

ある友人の思い出

近藤 節夫

私とSの初めての出会いは、数年前の夏、岳友と北アルプス剣岳の山行を計画していたとき、ある先輩と一緒に連れて行って欲しいと熱心に頼まれたころまで遡る。

山における彼は、いわゆる「岳人」とはほど遠く、容貌どおり何となく弱々しそうな印象を与える。決して根っからのクライマーではない。いつか後立山連峰を縦走していたときなど、疲労困憊のあまりサブ・リーダーであった私に「近藤くんはちっとも水を飲ましてくれない」とぼそぼそ泣き言を言ったことがある。そうした彼も、ことのほか山が好きだった。私との友情も山がとりもつ縁とあってよい。私とは同年齢であったが、精神的にははるかに大人であり、その態度は年長者のそれであった。(学年は彼が一年上だった)

日頃より自分は学生であるということを自覚し、勉学は怠らず、「現代の社会では、実質や内容よりもとかく外見で判断され評価される」といって、自分では不本意であるが、将来の処世術として止むを得ないといひながら各種の資格試験を目指していた。

Sは、物事を理路整然と説明し、第三者にまったく疑問をさしはさむすきすらも与えない。是々非々がはっきりしていた。頭もきれた。すでに英会話は物にして、仏語を学んでいた。

ダンス・麻雀も一通りやり、美術・音楽にも造詣が深く、身体は華奢ではあったが、背は高く、地方人であるにも拘らずスマートで、都会的センスに溢れていた。

そしてまた、彼はロマンチストであり、詩人であった。阿部次郎と武者小路を愛読し、アルバムを写真と詩でデコレートして、そこに阿部次郎の人生訓を挿入するのが常だった。理想家肌だった。一緒に鑑賞したルーブル美術展では、数々の名画を前に、しきりに考え込みその良さがどこまで理解できたのか、とにかく真剣にその良さを自分に取り入れようと努め、それを実生活にまで生かそうとする態度や、人生を杓子定規的に測り、二十五歳までに結婚し、十年間に子どもを二人もうける云々といった考え方は、私にはあまりにも高踏的で、はっきり言って、ついていけなかった。

私とは、二年間のつきあいだったが、卒業間近になって、貪欲なまでのSの意欲は、卒論も英文で仕上げ、就職先も再三に亘って吟味し、選択したうえで受験し決まっただけに、彼の理想は完璧なものになったようだった。卒業式のあとで、私に夕食をご馳走してくれ、例によって彼の哲学を論じたあとで、名古屋へ赴任して行った。そして、名論調で彼の理想を説き、ほぼ隔週ごとに手紙をくれた。

希望通り輸出関係の職場に配属され、まさに理想が現実にマッチして、彼には勿論、私にもバラ色の人生を歩み始めたように見えた。

私は、Sのそうした生き方に対して敬意を払いながらも、なぜか一面長身瘦躯な外見上

のSそのままに弱々しい、ひとつ間違えば壊れやすい陶器といった印象をもった。

それから半年ばかりして、突然便りが途絶えてしまった。正月になって久しぶりに年賀状をもらい、相変わらず元気でやっているなど安心したが、投函地が郷里の柏崎であったことが気に懸った。

一月ばかりして、ふいにただ一言、会社を辞めたと便りがあった。その間の経緯・内情については、その後会ってもいないのであくまで推測の域を出ないが、理想と現実のギャップに突き当たり、思い悩んだ末の行動であろうと、そのとき私なりに解釈した。心の痛手は覆うべくもなく、その後はさっぱり音信もなかったが、漸く今年の春になって、その間の事情について簡単な手紙をくれた。果たして私が懸念していた通り、仕事の上で、特に会社内におけるヒューマン・リレーションにおいて行き詰まったと説明してくれた。

私もその後、社会人となって同じようなジレンマに陥ったが、当時三田で知り合った才媛と新家庭を築いていたSが、これほどまでに思いつめたということは、考えてみればこれまでの生活があまりにも順調であっただけに、余程現実のずれが大きなショックだったに違いない。

いままでいつも話の聞き役に回っていた私としては、どうして慰めてあげたら良いのか、ただ当たり障りのない言葉で励ましてあげるに過ぎなかった。

それにつけても私は、彼がいつか鋭い口調で言っていた「適者生存」という一語が、奇しくも彼の身の上に遭遇した巡り合わせに驚く。

それというのは、例えばアメリカでは、医者にかかったときの治療費がべらぼうに高いということであり、従って医者にかかるということは、家計が苦しいときには、それを破綻せしめる要因ともなりかねない。それ故にアメリカにおいては江藤淳に言わせれば、「病人は不適者であり、不適者であることは悪である。悪は、当然善であるところの適者に敗れなければならない」と話は段階的に飛躍する。

Sもまた、こうした考え方を抱いていた。彼なりの解釈をするなら、彼は現代社会では不適者であった。悪である。理想に燃えて仕事に向かった自分を「悪」と決めつけることになった。私は、ここに彼のあまりに性急で、一面的な性格を見るのだ。もっと幅広い、弾力的な考え方をもったときに、彼はその真価を十分発揮するであろう。

.....

あれから三年。つい最近の手紙では、漸く心の傷も癒えて、この夏には外国人の友人と北アルプスを縦走したとあった。そして、いまでは一子をもうけ、郷里で家業（確か呉服店であった）を手伝いながら、公認会計士をめざして勉強中ということである。自分でも試練に遭ったために人間的に成長したようだと言われてあった。私もそう思う。文面には、ことさら過去の苦い経験にふれあいで、現在の生活、これからの方針を簡潔に記しているところに、まだ苦しみが残っている様子がかがえるが、新しい道を歩み始めている点に私の心は明るくなった。その後、二信ばかりもらったが、いまだに彼お得意の人生論がみられない。

しかし、いましばらく時間を待ちたい。今度こそは、世の荒波にも十分通用する、否、彼が以前非難していた「現代の社会云々」の現代社会の弊害をぶち壊すようなスケールの大きい、大地に根を張った土性っ骨のある「S流哲学」を聞かせて欲しい。

彼は、もう少し自分で己の生活を確立してから私に逢いたいと言う。何を私に遠慮しているのか。今度あったら、私も彼一流の弁舌に乗ぜられないで、齒に衣着せず切り替えしていくつもりだ。

いまでも思う。彼が威勢の良かったころ、もっとちくりちくりと意見を言うべきだった。でもまあいい、私には楽しみがひとつ増えた。Sイズムは如何に変貌したか。期して待とうと思う。

(四回生)